SERVICE Adove Self
超我の奉仕

国際ロータリー第2500地区　第３分区

INTERCITY MEETING

都市連合会

テーマ
「超我の奉仕」 今　私たちに出来ることは

報 告 書

ASAHIKAWA MORNING ROTARY CLUB

■と　き
2006年４月15日（土）13：30〜
■ところ
旭川パレスホテル（旭川市７条通６丁目）

■ホストクラブ
旭川モーニングロータリークラブ

2005～2006年度　R.Ⅰテーマ

二世紀への出発　原点に戻ろうロータリー

[超我の奉仕]

～百年を礎に原点に戻ってもう一度ロータリーを語ろう～

2005～2006年度　R.Ⅰ会長　カール・ヴィルヘルム・ステンハマー

ロータリーの綱領

ロータリーの綱領は、有益な事業の基礎として、奉仕の理想を鼓吹し、これを育成し、特に次の各項を鼓吹育成することにある

第1．奉仕の機会として知り合いを広めること；

第2．事業および専門職務も道徳的水準を高めること；あらゆる有用な業務は尊重されるべきであるという認識をふかめること；そしてロータリアン各自が業務を通じて社会に奉仕するためにその業務に品位あらしめること；

第3．ロータリアンすべてがその個人生活、事業生活および社会生活に常に奉仕の理想を適用すること；

第4．奉仕の理想に結ばれた、事業と専門職務に携わる人の世界的親交によって、国際間の理解と親善と平和を推進すること。

2005～2006年度　ＲⅠ第2500地区　第３分区

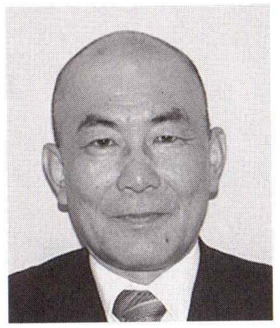
INTERCITY MEETING

「超我の奉仕」今　私たちに出来ることは

プ ロ グ ラ ム

12:30～13:30	**登　録**（３Ｆパレスホール）		
13:30～14:00	**開　会**	総合司会　ＩＭ実行幹事	武田昭宏
		アシスタント	竹村加奈
	点　鐘	ＩＭリーダー	竹村陽子
	国　家「君が代」	ソングリーダー	妹尾佳晴
	ロータリーソング「奉仕の理想」斉唱		
	開会のことば	ＩＭ実行委員長	友重正親
	歓迎の挨拶	ホストクラブ会長	酒井秀雄
	地区ガバナー紹介	ＩＭリーダー	竹村陽子
	各パストガバナー紹介	〃	〃
	地区幹事・副幹事紹介	〃	〃
	第３分区クラブ会長紹介	〃	〃
	地区ガバナー挨拶	ＲⅠ第2500地区ガバナー	合田賢二
	ＩＭリーダー挨拶	ＩＭリーダー	竹村陽子
14:00～14:10	**休　憩**		
14:10～14:26	**ビデオ上映**　エチオピアの人々と共に（16分）	ＩＭ実行総務委員長	河﨑高麗男
14:26～15:26	**講演者登壇**　（講演者紹介）	ＩＭ実行総務委員長	河﨑高麗男
	講　演　日本国際飢餓対策機構　総主事　神田英輔氏		
	テーマ“63億人の食卓”		
15:26～15:30	**支援金贈呈**	ＩＭ実行委員長	友重正親
	日本国際飢餓対策機構より感謝状授与	ＩＭリーダー	竹村陽子
15:30～15:40	**講　評**	ＲⅠ第2500地区ガバナー	合田賢二
15:50～16:20	**閉　会**		
	障害者クロスカントリースキーフェスタ2006 in 旭川（第８回日本障害者　クロスカントリー競技会）	お礼挨拶　東北ＲＣ会長	鈴木　哲
	次期第３分区ガバナー補佐挨拶	旭川ＲＣ	伊藤利夫
	次期ホストクラブ挨拶	旭川ＲＣ会長	山本憲彦
	閉会の挨拶	ＩＭ実行副委員長	深田篤廣
	点鐘	ＩＭリーダー	竹村陽子
	諸事お知らせ	ＳＡＡ	武田龍二
16:30～18:00	**懇　親　会**（３Ｆパレスホール）	司会　ＩＭ親睦委員長	福居恵美子
	開会のことば	モーニング幹事	桑原義彦
	乾杯	ＲⅠ第2500地区パストガバナー	七戸幸夫
	開宴		
	アトラクション紹介「手に手つないで」	ＩＭ親睦委員	城台幸子
	万歳三唱	ＲⅠ第2500地区パストガバナー	奈良尚久
	閉会のことば	ＩＭ会場委員長	飛弾野正幸

開会の挨拶



2005年～2006年度
ＲＩ第2500地区第３分区　IM実行委員長　**友　重　正　親**

北国の旭川にも、春の訪れの感じられる今日この頃、合田賢二ガバナー、並びに黒田一秀、七戸幸夫・奈良尚久・清水哲也・豊島弘道パストガバナー、臼井呉行地区幹事・木戸辰浩地区副幹事、及び、家内裕典第６分区ガバナー補佐のご来賓各位をはじめ、多くの分区内ロータリアンの皆様のご出席を賜り、RI第2500地区第３分区インターシティミーティングを開催できますこと、心より厚くお礼申し上げます。

今回のIM開催にあたり、竹村陽子ガバナー補佐のご指導のもと『「超我の奉仕」今　私たちに出来ることは！』とテーマを掲げ旭川モーニングロータリークラブの全会員が一致団結し準備を進めてまいりました。しかし、当クラブにとりましては、創立以来初めてのIMのホストであります。何かと不行き届きの点があろうかと存じますが、ロータリーの友情と寛容の精神で、お許しいただきますよう、お願い申し上げます

また、本日は、日本国際飢餓対策機構　総主事　神田英輔先生をご講師にお招きし、「63億人の食卓」というテーマで、ご講演いただくことになっております。私たちロータリアンが奉仕活動を続けていく上で、示唆に富んだお話を伺えるのではないかと、楽しみに致しているところであります。

最後になりましたが、RI第2500地区第３分区のロータリアンの皆様の、御支援・御協力に心から感謝とお礼を申し上げ、開会のご挨拶と致します。

歓迎の挨拶

旭川モーニングロータリークラブ　会　長　**酒　井　秀　雄**

皆様　今日は…

ホストクラブを代表いたしまして一言ご挨拶を申し上げます。本年は、例年に比較いたしまして雪解けが遅く、今や遅しと春の大地の鼓動が感じられる季節となりました。

①　本日は第３分区内のロータリアンの皆様、ようこそこの旭川の地にお越し下さいまして心からのご歓迎を申し上げます。
また、合田賢二地区ガバナーをはじめ多数のパストガバナー先生のご臨席を賜り、本日ここにIMのご指導の場を与えて頂きましたことに、心からの感謝とお礼を申し上げる次第でございます。

②　私たち旭川モーニングRCは、竹村ガバナー補佐をはじめホストクラブと致しまして準備をして参りました。本年のRIのテーマはSERVICE ABOVE SELF『超我の奉仕』であります。

③　暦年にわたりまして、私たちのクラブのキャッチフレーズであります飢餓・病気・ストリートチルドレンに取り組んで参りました。その最も相応しい約50ヶ国で支援活動に従事されておられます日本国際飢餓対策機構の総主事神田英輔先生をお迎えいたしまして、テーマは‘63億人の食卓’という課題になりました。

④　本日、ここに旭川市におきまして、IMが最も有効な情報教育研究の会合として有意義な一日であることを希望いたしまして、心からの歓迎の挨拶とさせて頂きます。有難うございました。

私たちにできること。
〜第３分区ＩＭに寄せて〜

国際ロータリー第2500地区　2005〜06年度　ガバナー　合　田　賢　二

ロータリーは、1905年にポール・ハリス以下４名が初会合をもって以来、この２月23日で101回目の誕生日を迎えました。最初の奉仕団体として地域や世界に奉仕を捧げ、１世紀を終え、今年度は第２世紀のスタートとなる節目の年度となりました。2005-06年度、カール・ヴィルヘルム・ステンハマー国際ロータリー会長は、この記念すべき年度のテーマとして、ロータリーの公式標語であり、根本的な精神指標でもあります「超我の奉仕」を掲げています。ロータリーの本質に立ち返り、２世紀のロータリーを構築しようとも呼びかけられています。

カール・ヴィルヘルム・ステンハマー国際ロータリー会長はロータリーが取り組むべき具体的な事項として、特に、地球や人類の基本的ニーズであります「識字率向上」と「水保全」を掲げています。いずれも第１世紀ロータリーが長年にわたって継承し取り組んできました。教育機会の提供、貧困の解消、環境の保全等を通じて、地球総体としての発展、成長を目指しています。

とりわけ「水保全」については、衛生的で安全な水の供給を受けられずに感染症により無駄に命をおとす人々は数知れず、国連でも「経済発展、貧困緩和、環境、そして平和と安全への脅威」と言い表わしています。１人の人間の１年間に費やす食糧を生産するためには、2000リットルとも5000リットルともいわれる良質な水が必要となります。人間の生にとって極めて根源的な水が、極めて危機的な状況にあることをまずご理解いただきたいと思います。

第３分区IMでは、基調講演に日本国際飢餓対策機構総主事であります神田英輔氏をお迎えし、年度テーマ「超我の奉仕」を受け、真正面から、人類が抱える水の問題、食糧の問題、飢餓の問題に言及しています。63億とも65億人ともいわれる人類の食卓がいかに危機に直面しているか、また、資源を消費する一方の日本経済のあり方、低下の一途を辿る日本の食糧自給率の姿に、飢餓が決して他人事でないこと、一人一人の日本人の生き方とも大いに関連があることを痛切に思い知らされます。

そして、この地球上に共に生きる一人の人間として、また「超我の奉仕」を掲げる一人のロータリアンとして、さて、何ができるのか、しなければいけないのか、思いを巡らさなければなりません。

地球や人類への献身と同時に、職業やクラブの活動を通じて、地域社会の整備や発展、繁栄のために奉仕すること、寄与することも、ロータリアンの責務であります。日本の食糧供給基地ともいわれる、第2500地区・北海道の道東、道北地区に暮らし、生業をいただく私たちロータリアンが、これからの世紀に地域へ何をお返しできるのか、そして地球にどのようにお役立ちできるのか、このIMを通じて、一層、そのイメージが膨らみ、具体化されることを期待して止みません。

御礼とご挨拶
ーロータリアンの思いをＩＭに託してー

国際ロータリー第2500地区第３分区　ガバナー補佐　竹　村　陽　子

2005-2006年度インターシティーミーティングの開催にあたり、合田ガバナーはじめ黒田・七戸・奈良・清水・豊島パストガバナーそしてロータリアン皆々様のご協力ご支援を頂き、心より御礼申し上げます。

当RCとして何ができるか、又この機会をどのように生かすことができるかを熟考致しました。結果、継続事業として長い間大切に育んで参りました、「飢餓・病気・ストリートチルドレンのために」に焦点をあて、世界の貧困と餓えに苦しむ人々の現状を少しでも理解して頂き、合わせて日本の食糧事情を省みるきっかけの一つとなればと思い、テーマを『「超我の奉仕」今　私たちに出来ることは』に致しました。

今だ、餓えのために死亡する人は、１分間に17人（内12人は子供）１年間で1000万人という膨大な数になります。

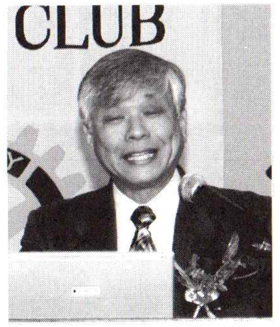
先進国といわれる日本にも、餓えと貧困に苦しんだ歴史があったはずです。地球が一つになろうとしているこの21世紀に、国や民族の違いを乗り越え、心を通じ手を取り合い、地球家族としてともに歩もうではありませんか。

炎天下の荒地を幾日も食糧を求めて歩き続けて来た人々に、文盲のために薬と間違って赤ちゃんに農薬を飲ませた母親に、空腹のあまり地面に這いつくばって柔らかい小石を食べる子供たちにロータリアンの手を差しのべましょう。

最後にロータリアンの皆々様の友情に深謝申し上げお礼のごあいさつとさせて頂きます。

講 演

超我の奉仕・・・今、私たちにできることは？
63億人の食卓から考える



日本国際飢餓対策機構 総主事 神 田 英 輔

今日は「超我の奉仕・・・今、私たちにできることは？」という題をいただきましたので、"63億人の食卓"という視点から考えていきたいと思います。
先ほど二本のビデオを見ていただきました。最初のビデオは10年以上にわたって働きを継続してきたエチオピアにおける結果の一例を見ていただきました。次のビデオは、今、世界の子供たちがどんな生活を送っているのかということを見ていただきました。もし世界のみんなが一緒に食卓を囲んだとしたら、ある人々はたくさんの食べ物を持っており、ある人々はほんの少ししか持っていないという不平等さが現在の社会には存在しているのです。今日は、このような世界の現実をご一緒に考えてみたいと思います。

飢餓の現実

フィリピンでは、子供たちがごみの山でごみを拾い、それを売ってその日の食べ物を買っていました。学校へ行きたいけれど、時間もお金も無いのです。
私の目の前で死んでいったバングラディッシュのあの子は、お医者さんの話によると、日本のお金で一日に5円あれば必要なミルクを買え、死ななくても済んだということでした。非常にショックでした。私はあの瞬間まで世界の飢餓の問題はあまりにも大きな問題であり、たとい10万円、50万円を寄付したとしても「焼け石に水」。私など何もできないと考えていたのです。しかしバングラディッシュで、一日に5円あればあの子は助かったという事実を知って、私にもできることがあると思い始めたのです。インフレが襲ったバングラディッシュではミルクの値段がその後暴騰し、今は一日に40円必要だと言われています。
エチオピアのあの子たちは何をしていたのでしょう。2年以上雨が一滴も降っていなかったエチオピア北部のゴンダールという州でした。私達がトラックで食料を届けるまでの約1ヶ月間、あの子たちは何も食べていなかったのです。男の子たちが何人か集まって何かをしている姿を見ました。遊んでいたのではなく、地面から軟らかい小石を探して、それを口に入れてガリガリと砕いて飲み込んでいたのです。本当にショックな姿でした。
飢餓が原因で1分間に17人が亡くなっていると言われています。12人は5才以下の子供です。今日は入り口でみなさんに飢餓食の体験をしていただきましたが、あんなものでは飢餓を体験したとは言えないのです。十分に食べられない状態が何ヶ月も続いて栄養失調になり、そして病気を併発するなどして死んでいく・・・それが飢餓です。

飢餓の原因

では、なぜ飢餓が起こっているのでしょうか。食料が足りないからではありません。今世界にある食べ物で、世界のすべての人々が食べていけます。穀物だけみても、年間19億トンが生産されています。これは100億人を養うのに十分な量です。これだけの穀物があるのに、世界の人口の5分の4が食料不足で苦しんでいるという事実を見つめる必要があります。
人口が多いから飢餓が起こっているわけでもありません。貧しい人達がどんどん子供を産むから、もっと貧しくなって飢餓になっているわけではないのです。人口密度を見てみましょう。アフリカのソマリアは16人で、コンゴは21人です。日本は335人、人口密度の一番高いオランダは461人です。人口の多い方に飢餓があるのではなくて、人口の少ない方に飢餓があることが判ります。人口が多すぎるから飢餓が起こると主張している人々は、人間を単に「胃袋」とみなします。胃袋が多ければ食料がたくさん必要です。だから胃袋の数を減らすことが飢餓の解決になると言うのです。しかし、人間は胃袋だけの存在ではありません。知性を持った存在です。日本やオランダは、この知性を使って飢餓を乗り越えてきたのです。ソマリアやコンゴが飢餓で苦しんでいるから、食料を届ければ飢餓の解決になるという単純なものではないのです。ソマリアやコンゴでは、自分の名前すら書けない、足し算ができない子供たちがたくさんいます。むしろこの子供たちが自分の国の将来を考えられるような教育のお手伝いをしていくことの方が実は飢餓を乗り越えていく近道になるわけです。
では、なぜ飢餓が起こっているのでしょうか。富の偏在が大きな要因のひとつです。世界人口の20%が日本やアメリカの工業先進国に住んでおり、残りの80%は開発途上国に住んでいますが、工業先進国に住む20%の我々が世界中の食べ物などの80%以上のものを消費しているのです。みなさんはこのことをご存知だったでしょうか。だから日本には物が溢れています。ところが途上国の80%の方々は、20%以下しか消費できていないのです。しかもグローバル化の影響で、この格差がどんどん広がってきているわけです。

外国の土地や水で生かされている日本

日本は世界最大の食べ物の輸入国です。毎日大きな船や飛行機で世界中から食料がこの国に運ばれてきているので、

私たちの飽食が可能になっているのです。
ここで参考までに穀物の自給率を見てみましょう。オーストラリアやフランスは200%近い自給率があります。カナダ、アメリカ、ドイツも１００%を越えています。最悪と言われているイギリスでも109%あります。食糧自給は先進国の条件であると言われています。ちなみに、開発途上国はどうでしょうか？子供が石を拾って食べていたあのエチオピアは85%で、15%足りません。バングラディッシュは10%足りません。隣の北朝鮮は22%足りません。ですから、ここ数年間で300万人ぐらいが餓死していったと言われています。日本はというと、飼料用を含む穀物全体の自給率は、なんと28%しかないのです。（エネルギー換算の食料自給率は約40%）平成15年度は27%に落ちているのです。外国の土地や水を使って日本の私たちの穀物が作られているわけです。
スーパーマーケットの野菜売り場に行くとわかるように、最近は中国からたまねぎなど多くの野菜類、メキシコからはかぼちゃ、アメリカからはしょうゆや豆腐の原料になる大豆、そしてフィリピンからはバナナというように、多くが輸入品です。世界で最大の食物の輸入国の日本は、実は、世界最大の水の輸入国でもあります。穀物や野菜を育てるには水が必要です。穀物や野菜を輸入しているということは、目に見えない形の水を輸入しているということになるのです。
今、途上国では貧富の格差がどんどん広がっています。途上国83カ国では、約3%の大地主が土地のほとんどを持っていると言われています。残りの人達は自分の農地を持っていない農民です。土地なしの農民というのは、日雇いで大地主に雇われるしか生きる道がありません。先日アフリカのコンゴから来た一人の方によると、とうもろこし畑で働く農民は、仕事をもらえた日には、朝から晩まで働いて日本のお金にすると10円たらずの日当だそうです。日本が、このような国の地主さんと交渉してとうもろこしを買い占めたら、この貧しい人々はどうなってしまうのでしょう？実は、これが今世界で現実に起こっていることなのです。市場経済の原理によると、富のあるところに食料は集まります。ですから、経済的に豊かで貿易黒字を持っている日本には世界中から食料が集まってきているのです。開発途上国の人々を飢餓に追い込むことによって今の日本の飽食が成り立っているという構図が見えてきたのではないかと思います。3億人分以上を養える5800万トンの食料を世界中から輸入しているのです。しかも「ごみ天国」の日本では1億人以上が食べられる1940万トンの食料を捨てています。「捨てるぐらいだったら、持っていかないでよ、捨てるぐらいだったら返してよ。」という悲痛な声が聞こえるような気がします。世界と深く繋がっていなければ生きていけない日本は、こんなことで世界と仲良くできるのでしょうか。

飽食の継続は可能か？

日本で飽食を続けるための絶対条件が3つあると言われ続けています。第一は、貿易黒字の確保です。この黒字で世界中から食料を買ってくることができるのです。第二番目には、食料と石油の確保ということです。石油を売ってくれる国、食料を売ってくれる国を確保するということです。第三番目には、平和の確保ということです。この3つの条件のうち1つでも崩れたら、この日本から食料は潮が引くように消えていくと言われています。
この3つの条件は大丈夫なのでしょうか。貿易黒字がいつまでも右方上がりで続くのでしょうか。食料をずっと確保できるのでしょうか。石油や平和を確保できるのでしょうか。

もうひとつの独り占め

これまで「食物」を独り占めすることによって飽食が可能になっているということを見てきましたが、もう1つの独り占めの例を挙げてみたいと思います。文明のバロメーターと言われている紙の消費量です。一人当たりの新聞紙の使用量を見ても、日本は22.1キロ、あのジャングルの国・インドネシアは0.6キロですので、37倍も使っているのです。紙の消費量の中でも一番マイナーなトイレットペーパーを取り上げてみましょう。日本人が一日に使うものを繋げていったら、この旭川からどの辺まで行くと思われますか？ＮＨＫの『暮らしのジャーナル』という番組がありましたが、その番組によると、地球を25周にもなるのだそうです。本当のところはもっと多く使っているらしいのですが、このＮＨＫの番組では1日で1人当り6メートル使うと計算した結果だそうです。皆さん考えたことはあるでしょうか。1日で地球を25回まわる分のトイレットパーパーが水洗のトイレに流されているというのです。あの紙というのは木のパルプが原料です。日本の木が消えて無くなっていないということは、どこか他の国から持ってきているということです。日本に付けられた有難くないあだ名がたくさんありますが、その1つは「森食い虫」というものです。大蔵省が木材チップの世界貿易量を発表していますが、世界貿易全体のなんと70%が日本に来ているのです。「森食い虫」日本と言われるわけです。熱帯雨林だけでも、毎分東京ドーム7つ分が無くなっていると言われています。これだけ多くのものが日本の快適さを支えているのです。

人類全体の危機

生態学者のイプセン・カマラが警告しています。このままのペースで木が切られていったら、人類最後の密林といわれているアマゾンの密林は180年後には完全に消滅してしまう、人類の将来にとって非常に危機的な状況だと指摘しています。森林伐採の結果、木が伐採されることによって光合成が鈍化し、二酸化炭素が増え、地球の表面を二酸化炭素が厚く覆い、地球の温暖化という現象が起こっているということはみなさんよくご存知のことです。この温暖化がどんどん進んでいるわけです。
アルプスの氷河は既に半分に減ってしまっています。北極圏でも温暖化が進み北極の氷は数十年前よりも42%も減ったと言われています。氷の厚さも40%薄くなりました。南極の氷も同様で、毎年152km3の氷が失われています。この3年間だけで、東京ドーム40万個分の氷が消失しているのです。2002年に南極の棚氷が大規模な崩壊をしたときの衛星写真をご覧ください。棚氷は厚さが最低200メートルあるのです。このことは海面の上昇を招いています。この20世紀の間に20センチ上昇しました。南太平洋には珊瑚礁でできた島がたくさんあり、海水面の上昇が深刻な影響を与えています。キリバスという国では、すでに2つの島が消失しました。ツバルでも移住が始まっ

ています。日本でも、もし50センチ海面が上昇したら286万人が影響を受けることが予測されています。さらに大変なことをIPCC（気候変動に関する政府間パネル）が発表しています。2025年には50億人が水不足になるということです。また、人工衛星で調べた結果、世界の耕地の7割で砂漠化の兆候が始まっているということです。驚くべき数字です。日本はいつまで現在の飽食を続けられるのでしょうか。もうすでにアフリカ、アジア、南米で飢餓が起こっているのです。日本はお金があり、平和があるから、今のところ輸入ができているだけなのです。
さらに深刻なことが指摘されています。アメリカのシンクタンク、天然資源保護協会（ＮＲＤＣ）が出している数字ですが、今のままで温暖化が進んでいくと、100年後にはカリフォルニアが55度になるということです。アラスカは16度で大洪水が起こると報告しています。日本はだいたいカリフォルニアと同じ気温なので、カリフォルニアが55度になるということは、日本も55度になるということです。人類は生きられるのでしょうか。かなり危機的な状況になっているのです。

真の原因

他者を滅ぼし、最終的には自分自身も滅ぼし、自己中心的な生き方が実は問題なわけです。飢餓の本当の問題はどこにあるのか、私はこの人間の自己中心、そして力や富こそが人を幸せにするという価値観、だから力やお金を手に入れるためだったら、何をしても構わない、人が死んでいこうが構わない、こういった間違った価値観が今広がっている、これが飢餓の本当の原因ではないかと思わされています。その結果、命を軽んじる心が育まれてしまっているのです。今必要なことは、それこそ今日のテーマ、「超我の奉仕」自分の利益を超えた奉仕、社会貢献ということです。

超我の奉仕

先ほどエチオピアで子供たちが石を拾って食べている映像を見ていただきましたが、あの日に私があの場所で出会った二人の女の子とおじさんの話が「ゴンダールのやさしい光」という絵本になって出版されています。あのおじさんの生き様に私たちの生き方のヒントがあるような気がします。
1984年から85年にかけて、エチオピアでは一年間で100万人の方々が餓死したと言われていました。私たちも何とか日本から助けを届けたいということで、エチオピアに飛びました。緊急に食料援助が必要といわれていた北のゴンダ－ル州にトラックで食料を運んだのです。ゴンダールには近くの村々から約2000人の方々が食料を待っていました。トラックから食料を降ろす間、先ほど映像で見ていただいた石を拾って飲み込んでいる子供たちに出会ったのです。大変ショックなことでした。ですから準備が整い次第、すぐに私たちは食料の配給を始めました。
しばらくして、ゴンダ－ル州の隣のウォロという州からきた２人の女の子が私たちの前にやってきました。お姉ちゃんが８才、妹が４才ぐらいです。３日３晩、歩き続けて高い山、深い谷を越えてきたと言うのです。もちろん裸足です。ウォロでも全く食べ物がなくなり、父親は3ヶ月前に死に、母親は1ヶ月前に急に目が見えなくなったと言うのです。栄養失調による失明だと思われます。兄弟もみんな死んでしまったとのことでした。準備した食料を私があげようとした時、会話を聞いていたエチオピアの一人の兵隊がこの子たちを追い払ってしまったのです。私は非常に腹が立ちましたが仕方ありません。40分ぐらいして、この兵隊がやっと遠くに行ったので、食料の袋をもって広場に出たのですが、近くの村から来た2000人ぐらいの群集に紛れてしまい見つかりませんでした。暗くなり、とうとう夜になってしまいました。電気も何もない村です。私たちもテントを張って、地面に寝袋を着てそこに寝ながら食料配給を続けていたのですが、もう寝るしかありません。暖かいはずの寝袋の中で寒さでガタガタ震えていました。なぜかというと、ここは標高4000メートル以上あって、富士山の頂上より高いところなのです。エチオピアは、皆さんご存知の通りアフリカの屋根と呼ばれ、平均標高が2500メートルあるのです。寒いわけです。でも、自分の寒さよりも私はあの２人の女の子のことが気になって、眠れなかったのです。あの２人はほとんど裸・・・どこで野宿しているのだろう。しかも、長い間何も食べていなさそうだった。大丈夫かな？　死んでいなければいいけどなんて思ったら、眠れませんでした。
夜が明けると同時に私はテントから飛び出して、色々なところを探したのですがいないのです。そのうちに早起きのエチオピアの農民が起きてきたので尋ねて歩きました。一人の農民が教えてくれましたので、その家に行ってみると、中から一人の汚い臭いおじさんが顔を出したのです。このおじさんの着ているものは、まるでボロ雑巾。何週間も水浴びをしたこともないような垢がこびりついた体でした。臭さを我慢して「おじさん、昨日ウォロから来た二人の女の子・・・おじさんの家に泊めてもらったのではないかと聞いたので来たのですが・・・」と言ったら、そのおじさんはニコニコして、「あの二人だったら家に泊めたよ。あなたは昨日私たちに食べ物を配ってくれた日本人じゃないの。あんたたちから貰った食料はうちの家族にとっても約1ヶ月振りで久しぶりに料理をして家族みんなで食べたんだ。美味しかったよ、ありがとう。あのウォロから来た２人の女の子にも一緒に食べてもらったら喜んでくれてね。」と話してくれました。あの２人はこのおじさんの家に泊めてもらっただけじゃなくて、食べさせてもらえてよかったなと、私は思ったのですが、このおじさんと話をしている間、家の中が静かだったので「あの２人はまだ朝早いから寝ているのですよね？」と聞いたら、「あの２人は今朝暗いうちに起きて、お母さんのところに帰りたい、と言ったので、あんたたちから貰った中から、ほんの少しだったけど、分けてやったんだ。喜んで帰っていったよ。」と話してくれたのです。その言葉は、私にとって非常にショックでした。このおじさんとおじさんの家族だって、1ヶ月何も食べていなかったのです。私達が各家庭に配ることができた量というのは、ぜんぜん足りない量です。次回の配給予定の計画を立てている最中なのに、それを見ず知らずのあかの他人の２人に分けて食べさせるということだけでも大変なことです。でも、このおじさんはそれをしただけではなかったのです。自分が貰った中から、お母さんに持っていきなと言って分けてあげていたのです。何を意味するのでしょう？このおじさんとおじさんの家族が真っ先に食料が底をついてしまい、真っ先に餓死する可能性が出てきたということです。この臭い汚いおじさんでしたが、じっと見ているうちに私のうちに感動が沸いてきたのです。このおじさんは、外見は臭い汚いおじさんだけど、人間

として何と美しい生き方をしているのだろう。人ってどんなときに美しく輝くのかが判ったような気がしました。きっと自分にとって大切なものを他の人に分かち合っているときに人は美しく輝くのです。私は自分の姿とあのおじさんの美しい姿とが対させられた思いがしたのです。私もこのおじさんのような生き方ができたらとあの時思わされました。あのおじさんの言った言葉を忘れることができません。「もしも私があの２人の女の子だったら、きっと私がしたのと同じことをして欲しいと思ったに違いないよ。私は人として当たり前のことをしただけ」そしてこの言葉を教えていただきました。「だから人にしてもらいたいと思うことは、何でもあなた方も人にしなさい。」という言葉を教えてくださったのです。私達がこれは俺のものだからお前に分けてやらないなんて言ったら友達同士でも争いになります。国と国だったら戦争になります。でも、あのおじさんみたいに大切な物でも分かち合っていくことを身につけていったら、きっと私たちの対人関係は変わるでしょう。国と国との関係も変わるでしょう。このような生き方こそが、超我の奉仕、平和を作り出す生き方ではないかと思います。私にできることはなんだろうということを是非一緒に考えていただきたいと思います。
今日は最後に、「ラビング」という募金箱をみなさまにさしあげました。これは有名なミレーという画家が描いた「落ち穂拾い」という絵の精神を実行するために作られました。ご存知だと思いますが、あの絵は旧約聖書を題材にして描かれたといわれているのです。旧約聖書の中に、「畑を収穫できるような人は、畑の隅っこは刈り取ってはいけない。四隅を残しておきなさい。丸く刈りなさい」と命令されているのです。さらに「穀物の束を束ねる人は落ち穂が落ちたら、それは拾ってはいけない。畑に残しておきなさい。」という命令があるのです。やもめや孤児や外国人、働いて食べていけないような人達のために置いておきなさいとおっしゃっているのです。ミレーはそれを題材にして、あの落ち穂拾いという絵を描いたといわれているのですが、みなさんいかがでしょう。私たちにとっての畑の隅っこ、また、落ち穂とは何でしょう。もったいないと言って畑の隅まできれいに刈り取ってしまう日本人の勤勉さは、他者への配慮を欠いた勤勉さです。この前ある女性の方が、実はあの話を聞いて以来、自分にとっての落ち穂は何かと考えた結果「私にとっては１円玉と５円玉は落ち穂だと思いました。ですからここ20年間、私は１円玉と５円玉は使わないで世界の飢餓で苦しむ人々のために貯めてきました」と言われたのです。私は、それを聞いたときにとても嬉しかったのです。ロータリーアンの皆さんは１円玉と５円玉がなければ食べていけないような皆さんではないですよね？　そうだったら、今の瞬間から決断しませんか。今後１円玉、５円玉は決して使わない、この世界の飢餓で苦しむ人に全部返していくと。今日も１日40円あれば、生きられる人がたくさんいるのです。ぜひこんなことを市民運動にしませんか？　国民運動にしませんか？　あのゴンダ－ルおじさんの生き方に少しでも倣う私たちになれたら嬉しいと思います。ご静聴ありがとうございました。

飢餓問題考えて

国際対策機構 神田総主事　都市連合会で講演

旭川

上川管内十一のロータリークラブが加盟する国際ロータリー第2500地区第3分区のインターシティミーティング（都市連合会）が十五日、旭川市内のホテルで開かれ、非政府組織（NGO）日本国際飢餓対策機構の神田英輔総主事が、開発途上国などの飢餓問題について講演した。（中橋潤一郎）

旭川モーニングロータリークラブでつくる実行委の主催で、一般を含む約三百人が参加。神田総主事は「六十三億人の食卓―今私たちにできることは」と題して講演した。

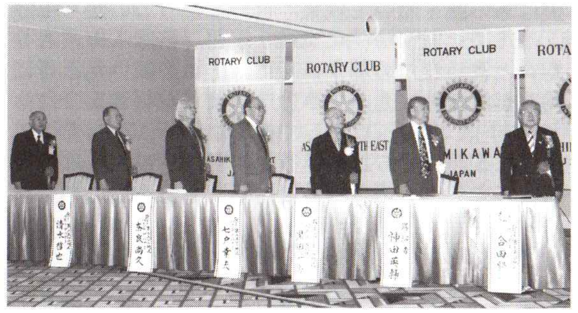
神田総主事は「世界の穀物生産量十九億トンは全員を養う十分な量があるのに、五分の四の人びとが苦しんでいる。日本や米国などの20％が、生産量の80％以上を消費している」などと指摘。「日本は約三億人分の食糧を世界から買って、一億人分以上を捨てている。世界から見ると飽食と快適の独り占めをしている」と説明した上で、「四十円あれば一人の子供の命を救える。一円玉や五円玉は使わずに、飢餓に苦しむ人々に贈ってほしい」と呼びかけた。

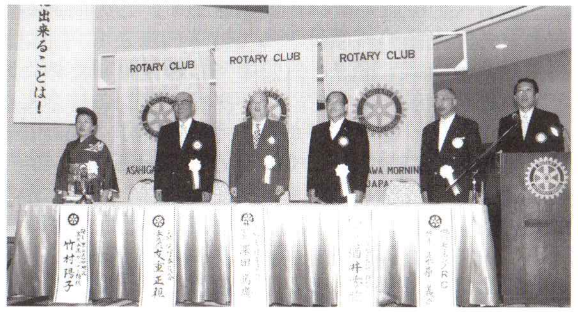
講演後、飢餓対策機構が取り組む南米ボリビアの学校給食プロジェクトへの支援金として、同実行委から十万円が贈られた。

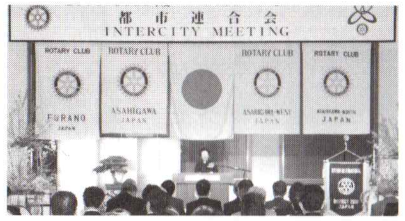
世界の飢餓問題について講演する神田総主事

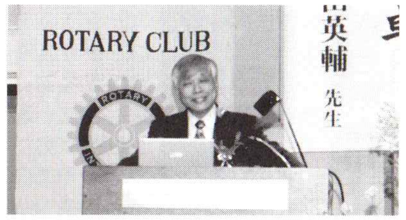
IM講演・懇親会風景

2005～2006年度　RI第2500地区 第三分区
都市連合会
INTERCITY MEETING









エチオピア

飢餓が原因で、
1分間に17人が亡くなっています。
12人は子どもです。

収支決算書

収入の部

科目	金額	摘要
登録料	1,980,000	396人
地区交付金	100,000	
雑収入	10,073	受取利息、ご祝儀
当クラブ負担金	300,168	
合計	2,390,241	

支出の部

科目	金額	摘要
総務費	492,725	講師謝礼 特別プロジェクト寄付 パネル展等
会場懇親会費	1,619,413	懇親会 会場費 飲料費
印刷費	278,103	プログラム 報告書
合計	2,390,241	

登録人数表

3月15日現在

科目	在籍会員数	登録会員数
旭川	83	80
旭川西	63	61
旭川北	52	52
旭川東	59	59
旭川南	27	26
旭川モーニング	21	21
旭川空港	14	14
美瑛	26	26
富良野	50	19
上川	21	16
旭川東北	24	22
合計	440	396

2005～2006年度
R I 第2500地区　第３分区 I M役員

R I 第2500地区　ガバナー	合田賢二
R I 第2500地区　パストガバナー	黒田一秀
R I 第2500地区　パストガバナー	七戸幸夫
R I 第2500地区　パストガバナー	奈良尚久
R I 第2500地区　パストガバナー	進藤和行
R I 第2500地区　パストガバナー	清水哲也
R I 第2500地区　パストガバナー	豊島弘道
I Mリーダー（第３分区ガバナー補佐）	竹村陽子
ホストクラブ会長（旭川モーニングＲＣ）	酒井秀雄
ホストクラブ幹事（旭川モーニングＲＣ）	桑原義彦

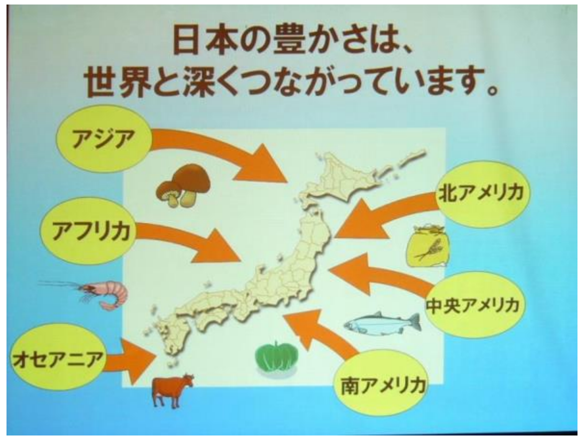
2005～2006年度
第３分区 I M実行委員会

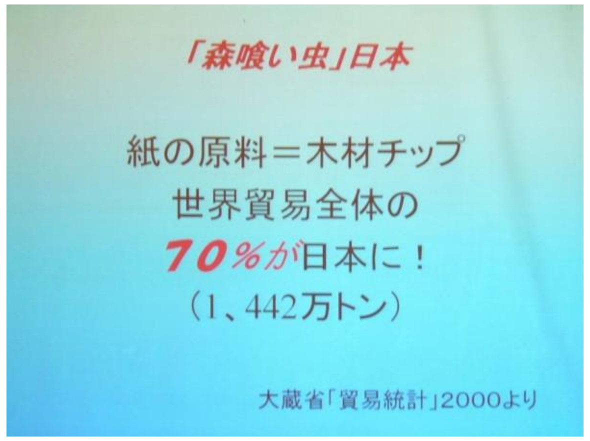
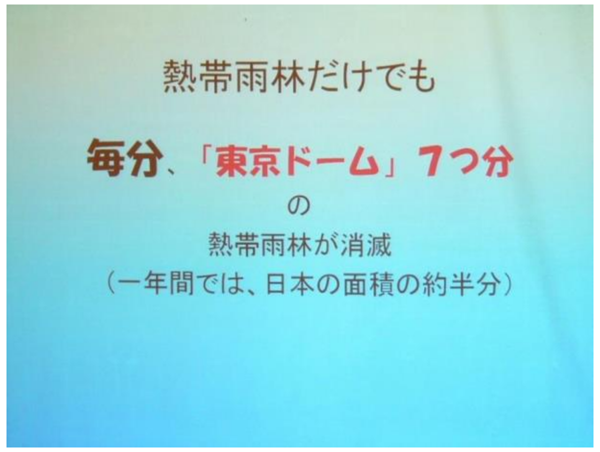
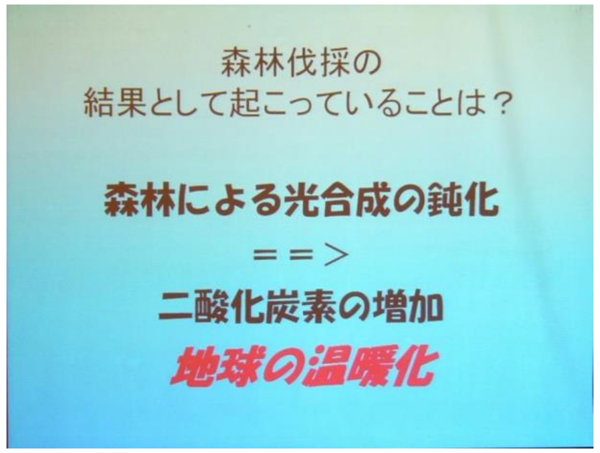
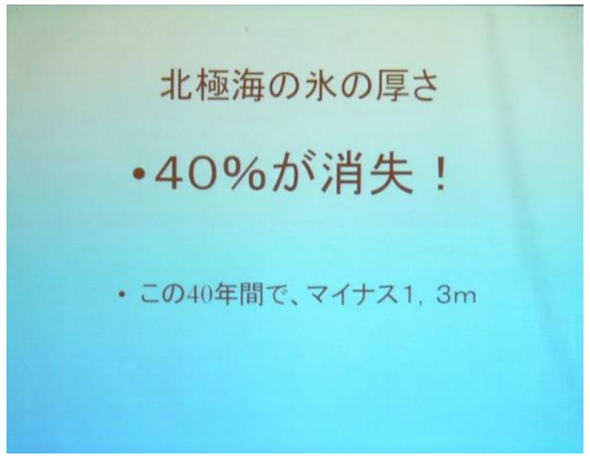
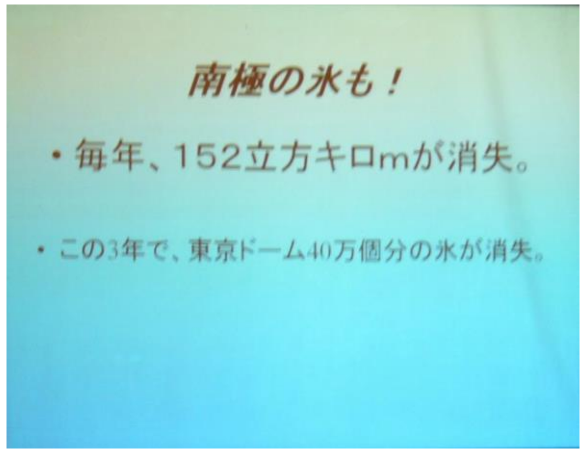
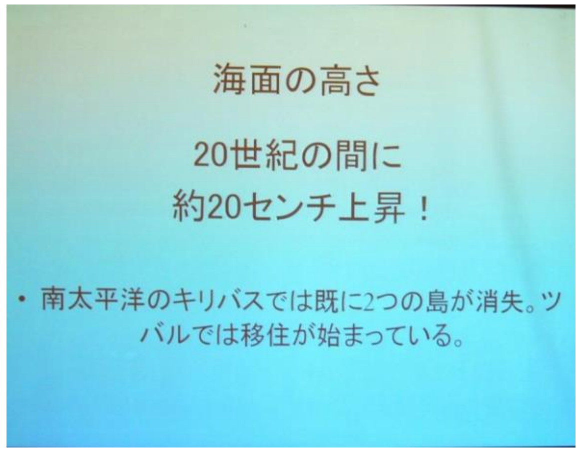
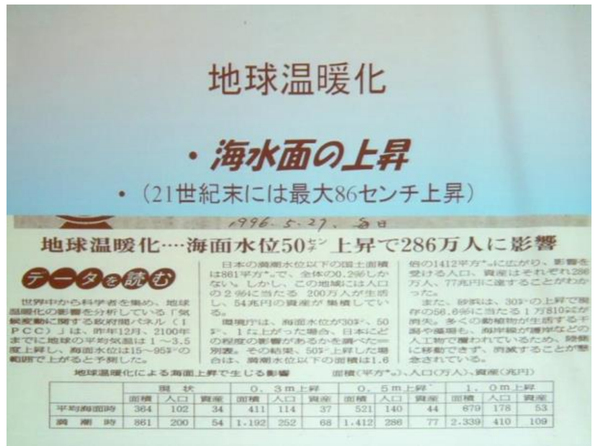
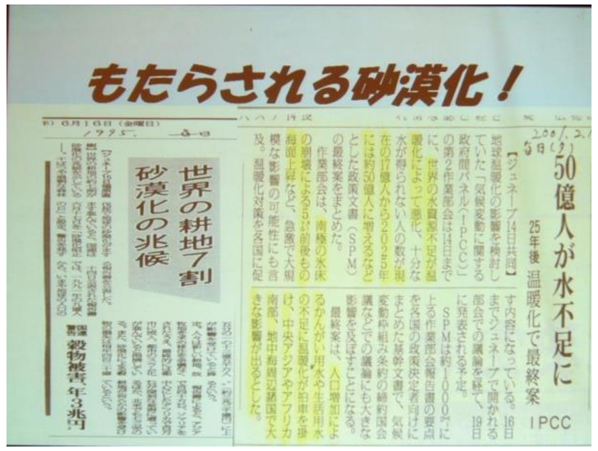
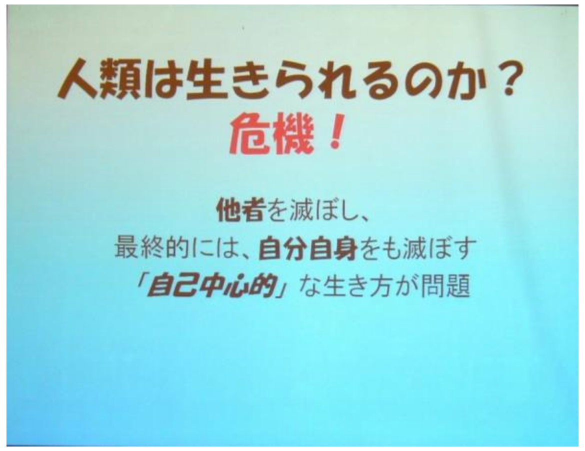
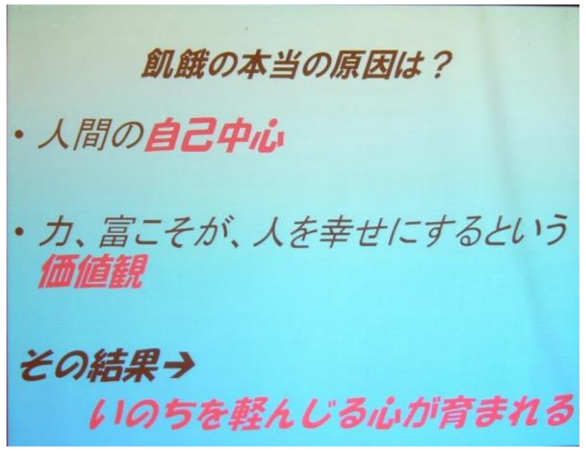
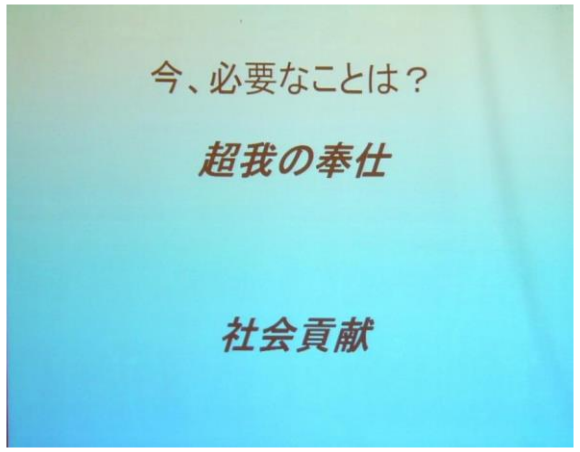
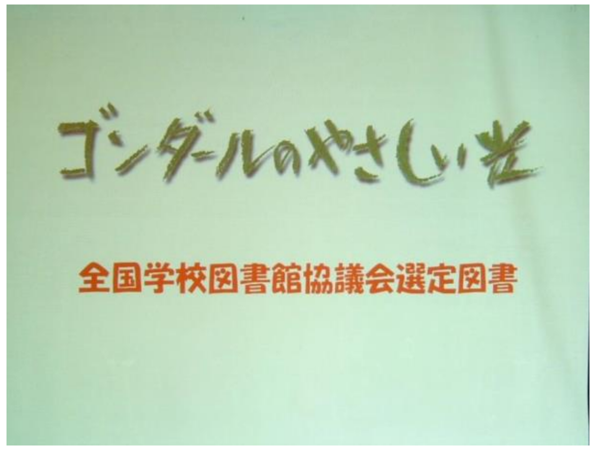
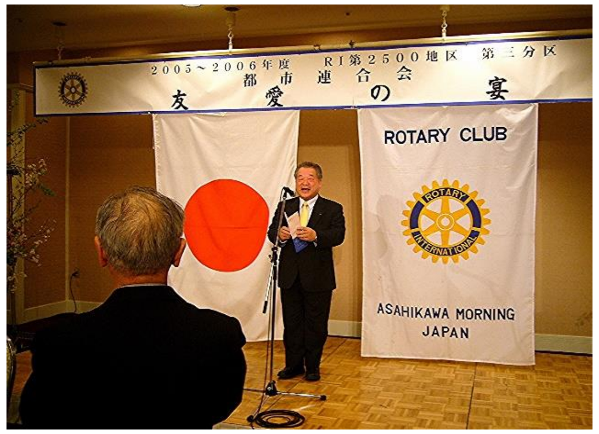
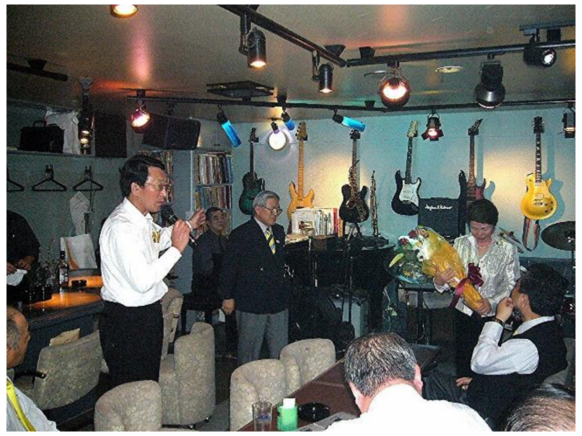
委員長	友重正親			
副委員長	深田篤宏			
幹事	武田昭宏			
副幹事	菊池勇人			
会計監査	太田耕嗣			
委員会	委員長	委員		
総務（進行）	河﨑高麗男	武田昭宏	武田龍二	妹尾佳晴
		佐々木靖文		
親睦（登録）	福居恵美子	豊島孝男	城台幸子	西尾美枝子
記録	竹澤元男	桑原義彦	妹尾佳晴	菊池勇人
		脇坂慎一		
会場	飛弾野正幸	竹澤元男	武田龍二	妹尾佳晴
		豊島孝男	菊池勇人	
接待	飯尾力夫	脇坂慎一	城台幸子	西尾美枝子
		会員夫人		
会計	高橋直勝			

国際ロータリー第2500地区第３分区
2005～2006年度　IM（都市連合会）記録
2006年６月発行

記録編集　I M 運営委員会
発行者　旭川モーニングロータリークラブ
印刷所　植平印刷株式会社

ＩＭ（ホスト旭川モーニング）　３６億人の食卓・世界の飢餓　・現地の子供の作品画　・会場入り口での飢餓写真集ポスター展示





神田英輔氏の講演内容　パワーポイントでのスクリーン画像